

一白粉略○中白粉にかぎらず、紅なども頬さき、口びる、爪さきにぬる事、うすくと有べし、こくあ  
かきはいやし、茶屋のか、にたとへたり、

〔事物紀原三冠冕首飾〕粧靨

近世婦人粧、喜作粉靨、如月形、如錢樣、又或以朱若燕脂點者、唐人亦尙之、段成式酉陽雜俎曰、如射  
月者謂之黃星靨、靨鈿之名、蓋自吳孫和誤傷鄧夫人頰、醫以白獺髓合膏、琥珀太多、痕不滅、有赤點、  
更益其妍、諸嬖欲要寵者、皆以丹青點頰、此其始也、又云、大曆宗○唐代已前、士大夫妻多妬者、婢妾少  
不如意、則印面、故有月點錢、苟如此、則固非嘉事也、宋武宮中、學壽陽落梅粧、此其遺意也、

〔源氏物語常夏二十六〕べにといふもの、いとあからかにつけて、かみけづりつくろひたまへる、

〔榮花物語御裳十九〕はぐろめ、くろらかにつけて、べにあかうけさうせさせて、つゝけたてたり、

〔安齋隨筆後編二〕べに古より顔とくちびるにべに付る事は、女の粧也、享保年中までは、女のか  
ほには、べにとて、櫻色によそほふ事にてありしに、京などは、去らず、江戸にては、元文中の頃  
より、顔にべに付る事やみたり、是は遊女のまねなりとぞ、遊女はべに付る事は、なきよしなり、近  
世はよき人の姫君なども、下々の風俗うつりたり、下々のものは、遊女又は歌舞妓のみの風俗を  
まなぶことになり、くだれり、唐の國にも、粉脂といふ事あり、粉といふはおしろいの事、脂といふ  
はべにの事也、近年生れたる女子などは、顔に付ぬ物也と思ふ也、

〔嬉遊笑覽一容儀下〕べには、和漢ともに、古へ面の色を粧ふ具にして、今の如く唇に塗ることはなかり  
しと見ゆ、さればこそ粉をくわへたんなれ、

〔譚話浮世風呂三編下〕おいへ、目のふちへ紅を付るのも、一體は役者から出た事らしい、おかべあ  
れも大かたはさうだらうが、昔からする人が有から、あの方はまアゆるしもせうよ、去かし目の  
ふちへ紅をつけた人は、老として目のふちが黒くなるツサ、